

# 「陰」に囚われるな、「光」に心を向けよ

上<sup>うえ</sup> 廣<sup>ひろ</sup> 榮<sup>えい</sup> 治<sup>じ</sup>

一九〇〇年代最後の年が暮れようとしております。例年、この時期になりますと、新聞やテレビは一年間の重大な出来事を回顧するのが通例ですが、さて皆様にとつての十大ニュースとは、いかがなものであったでしょうか。

どのような実践を心がけたか。最も力を注いだ実践は何であったか。どのような面で実践の実<sup>じつ</sup>が上<sup>じやう</sup>だったか。倫理の大道を歩む上で、どんな節目があったかなどなど。わが会の会友諸賢のことでありますから、多くのニュースが「実践」に発した慶ばしい結果であったに違いありません。

およそこの世に生じる出来事は、必ず光と陰の両面をもっております。しかしながら、私たちは光の側面だけに心を向けていけばよいと、私は単純に割り切るようにしております。もちろん陰の部分、暗い側面に眼をつぶれというわけではありません。

光と陰の両面をしっかりと認めたと、その光の部分に心を向け、その成果を喜び、より大きな光を

求めて積極的に生きるべきだと思うのです。陰の部分に囚とらわれて思い悩むな、と申し上げたいのです。

例えば、このところの不況のために、事業が不振で収入が激減したというような場合です。当然、家族そろって危機的状況を乗り切らなければなりません。そのためにかえって家族の心が一つになり、互いに支え合い仕え合って、家庭愛の実が上がったりもいたします。この場合、事業の不振や収入の減少などという陰の部分については、十分に原因を追求して対応策を考えなくてはなりません。しかし、その陰の部分に心を囚われ、落ち込んで悩み苦しみ自分を責めても、何の解決にもならないのです。

むしろ、家庭愛の実が上がったという副産物を大いに喜び、そのはずむ心で危機の打開に積極果敢に打って出るべきなのです。不振の事業の中にも光の部分は必ずあるはずです。無駄や無理が見えてきたり、信用の大切さに気づかされたり、新しい分野への挑戦のきっかけができたりもするでしょう。

ところが困ったことに、私たち現代人は、過去の時代に比べて、はるかに人間の力を信じて生きています。自分の運命を自分の力で決定できると誤解して生きていくといってもよいでしょう。人間は何でもできるし、個人もその能力によって、自らの運命を自由に決定できるとうぬぼれているのです。

そう誤解しているために、順境のときはよいのですが、希望通りに自分の運命を切り拓ひらくことができなかつたり、何らかの不運やトラブルに見舞われるという逆境に出合くと、その原因や責任が当の個人の内にあるのだと思ひ込むようになってしまいました。それは自分に能力がないせいだとか、学歴や職歴、家庭環境や資産、あるいは自分の性格のせいなどと考えたりします。しかし、いまさら変更のしようのない自分の過去に問題があるというのですから、出口のない陥か穽せいに落ち込んだようなもので、もがき苦しむことしかできなくなります。

このように、自分の陰の側面に悩み苦しむ日々はまことにみじめなものでありますし、その間の生活

ははなはだしく活力を失い、さらに深い陰を心に刻むことになるでしょう。とすれば、最初から思い悩むべきではないのです。陰の部分に囚われず、光の側面をのみ見るように努めるべきなのです。不運やトラブルの原因や責任を、卑小な個人の内に求めることをやめるべきなのです。人間は何でもできる、自分の運命を自分が決定できると、うぬぼれてはならないのです。

では、人々がもつと謙虚だった時代はどうだったでしょう。昔は、人の運命を決めるのは神とか天と呼ばれるものだと考えられていました。自分の不運もまた神の思召し、天の配剤だとそのまま素直に受け入れて、天意にそって生きようとしていたのです。天が定めたことであれば、個人が無駄な懊惱を深めることもなかったのです。

近代になり、科学が発達したとはいえ、私たちはどれだけのことを知ったのでしょうか。

実のところ、私たちはまだまだ人知を超えた環境の中で生かされているのです。私たちが、いま、地球上のこの一角に生きて在るといふ現実、人間の力によって現出したことではありません。私たちの生老病死もまた人知の及ぶところではありません。医学の進歩によって、わずかにそのテンポに変化をもたらすことができるようになっただけです。まして、私たちがいつ、どこに、どのようにして生まれるかなどということは、人間の力によっては一切変更することのできないものです。それらはみな、個人の内にその原因や責任を求めることなどまったく不可能ではありませんか。

宇宙に生起する森羅万象は大自然の摂理が律しているのです。そう見切ってしまうえば、私たちはどれほど無駄な心を使わずにすむことでしょう。私たちがすべきことは、自分の運命を素直に受け入れて、物事の光の側面にだけ心をとどめ、より大きな光を目指して、雄々しく積極的に生きてゆくことだけあります。

私は、古代の彫刻や建築などを見るたびに、その神々しさ、精神性の高さに打たれます。そして、現代の芸術の卑小さを思います。それは何故か。現代人が、何もかもを卑俗な自らの内に問い、ちつぽけな自分の価値観に頼って、輝きのない生をおくっているのに対して、古代人は人知を超えた光輝くもの、自然や神々に規範を求めていたからに違いありません。個人の行動を人知を超えた崇高なるものの判断にゆだねるとき、彼の行動が高邁なものになるのは道理だからです。

では、私たちの日々の実践とは何であるかといえば、古代人の在り方によく似ています。私たちは、どんな価値観をもつのも自由だとうぬぼれて、卑俗な個人の内に行動の規範を求めるようなことはいたしません。人知を超えた大自然の摂理に、すなわち倫理に、その判断をゆだねます。だからこそ、私たちの実践は明快で高邁なものになるのです。

私たちは、個人的な怒りや悩みや妄想を「心の無駄」として排します。倫理という崇高なもの、人々を至福に導く原理だけを尺度として、日々の実践に励みます。

不運や苦難に見舞われたとき、昔の人が、それを神のもたらしたものだとして受け入れて、神が望むままに身を処したように、私たちもまた、不運や苦難に見舞われたときには、自然の摂理が働くままに、「苦難は幸福の門」だと思い定めて、光の側面にのみ心を向け、積極的に対処しようとするのです。

古代人が生み出した芸術の神々しさは、人間を超えたもの、人間が憧れる崇高な精神、つまり光の側面に規範を求めたからこそ得られたものであったのです。とすれば、彼らの神々以上に確固として崇高な生活原理に規範を求める私たちは、彼ら以上に仕合わせへの実践の実を上げることができません。陰に心を囚われるな、光にこそ心を向けよ。卑小で低劣なものに目を奪われるな、光輝く崇高なもの

にのみ心をとどめよ。この一年の総決算も、光の側面から数え上げることにはいたしましょう。